



ONO Kazushi

Music Director

音楽監督
大野和士

4/9 4/10 4/19

1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者（現・桂冠指揮者）、バーデン州立歌劇場音楽総監督、ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。現在、都響およびバルセロナ響の音楽監督を務めている。2018年9月に新国立劇場オペラ芸術監督へ就任予定。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。

2017年5月、大野和士が9年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra and Barcelona Symphony Orchestra. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. Ono will be inaugurated as Artistic Director of Opera of New National Theatre, Tokyo in September 2018. He received numerous awards including Palmarès du Prix de la Critique and Asahi Prize. He was selected to be a Person of Cultural Merits.

A

Series

第852回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.852 A Series

東京文化会館

2018年4月9日(月) 19:00開演

Mon. 9. April 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

B

Series

第853回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.853 B Series

サントリーホール

2018年4月10日(火) 19:00開演

Tue. 10. April 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

メゾソプラノ ● リリ・パーシキヴィ Lilli PAASIKIVI, Mezzo-Soprano

児童合唱 ● 東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo, Children's Chorus

合唱指揮 ● 長谷川久恵 HASEGAWA Hisae, Chorus Master

女声合唱 ● 新国立劇場合唱団 New National Theatre Chorus, Female Chorus

合唱指揮 ● 三澤洋史 MISAWA Hirofumi, Chorus Master

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

マーラー: 交響曲第3番 二短調 (94分)

Mahler: Symphony No.3 in D minor

Erste Abteilung

I Kräftig. Entschieden

Zweite Abteilung

II Tempo di Menuetto. Sehr mässig.

III Comodo. Scherzando. Ohne Hast.

IV Sehr langsam. Misterioso.

V Lustig im Tempo und keck im Ausdruck

VI Langsam. Ruhevoll. Empfunden.

第1部

力強く。決然と

第2部

メヌエットのテンポで。とても中庸に
気楽に。スケルツァンド。あわてずに

きわめてゆるやかに。神秘的に

活発な速度で、表情は大胆に

ゆるやかに。平静に。気持ちをこめて

本公演に休憩はございません

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援： 明治安田生命 (Bシリーズ)

助成：公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団

演奏時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。

写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しみ拍手をお願いいたします。

4/9 A Series & 4/10 B Series

9

Mezzo-Soprano

Lilli PAASIKIVI

メゾソプラノ

リリ・パーシキヴィ



©Rami Lappalainen and Unelmastudio Oy Ltd

リリ・パーシキヴィはマーラー作品の世界的な歌手であり、これまでにサロネン、P.ヤルヴィ、ギルバートらの指揮でウィーン・フィル、ロンドン響、ニューヨーク・フィルなどと共演。ワーグナー歌手としても知られており、ラトル指揮ベルリン・フィルによる『ニーベルングの指環』に参加、ハンブルク州立歌劇場、フランクフルト歌劇場などでフリッカやクンドリーで登場、大野和士指揮ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）『トリスタンとイゾルデ』ではブランゲーネを歌った。フィンランド国立歌劇場では1998～2003年に首席ソリストを務め、カルメン、アムネリス、エーボリなどで登場。現在、フィンランド国立歌劇場芸術監督。

Lilli Paasikivi is one of the world's leading interpreters of Mahler song-cycles and symphonies. She has appeared orchestras including Wiener Philharmoniker, London Symphony, and New York Philharmonic under batons of Salonen, P.Järvi, and Gilbert. Since making her debut with Rattle and Berliner Philharmoniker as Fricka of *Der Ring des Nibelungen*, Wagnerian roles have become central to Paasikivi's work on stage at Staatsoper Hamburg and Oper Frankfurt. She sang Brangäne in La Monnaie's *Tristan und Isolde* under a baton of Kazushi Ono. Paasikivi is Artistic Director of Finnish National Opera.

Children's Chorus The Little Singers of Tokyo

児童合唱 東京少年少女合唱隊



© 藤本史昭

マーラー：交響曲第8番《千人の交響曲》（2014年3月9日／横浜みなとみらいホール／エリアフ・インバル指揮）

ヨーロッパの伝統音楽に基づく合唱音楽に取り組む日本初の本格派合唱団として1951年設立。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広い。年2回の定期公演の他、1964年の訪米以来海外公演は33回を数え、最近では2015年秋のマカオに続き、同年12月末～2016年1月初めにかけてイタリア親善公演を実施し好評を博した。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、スヴェトラノフ、アバド、ムーティら著名指揮者との演奏会にも出演、高い評価を得た。

The Little Singers of Tokyo (LSOT) formed in 1951 with the concept “for Japanese children to sing Renaissance works”. The founding spirit continues today, with a repertoire focusing on authentic choral works based on traditional European music. LSOT covers a wide range of music from Gregorian Chants to contemporary works. In addition to the regular concerts held twice a year, LSOT has made 33 overseas concert tours. They have also appeared with many orchestras and opera theaters at home and abroad, and have performed with maestros such as Svetlanov, Abbado, and Muti.

Chorus Master

HASEGAWA Hisae

合唱指揮

長谷川久恵



©LSOT

東京少年少女合唱隊の常任指揮者。主催公演並びに海外公演を牽引する傍ら、オペラなどの外部公演でコーラスマスターを数多く歴任。混声合唱曲にも対応する「コールスLSOT」や声楽アンサンブル [Vintage Voice of LSOT] を組織し、幅広い演奏活動を展開している。

Hisae Hasegawa is Principal conductor / Artistic Director of the Little Singers of Tokyo. She has conducted self-promoted concerts and overseas performances and also successively served as a chorus master of various outside performances including operas. She formed Chorus LSOT, a group which is capable of mixed chorus, and a choral ensemble Vintage Voice of LSOT as well, expanding wide-ranging performance activities.



マルティヌー：カンタータ《花束》（2014年9月8日 第774回 B定期／サントリーホール／ヤクブ・フルシャ指揮）

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外の共演者およびメディアからも高い評価を得ている。

New National Theatre, Tokyo, opened in October 1997 as the only national theatre for the modern performing arts of Opera, Ballet, Contemporary Dance and Play. Since then, New National Theatre Chorus has made its career and played a central role in many Opera performances all through the seasons. Their ensemble ability and rich voices have achieved acclaim from co-starred singers, conductors, directors, backstage staff as well as from domestic and international media.

Chorus Master

MISAWA Hirofumi

合唱指揮

三澤洋史



国立音楽大学声楽科卒業、ベルリン芸術大学指揮科首席卒業。1999年より5年間バイロイト音楽祭で合唱指導スタッフの一員として従事。2011年文化庁在外研修員としてミラノ・スカラ座で研修。2001年より現在まで新国立劇場合唱団指揮者。その業績が評価され、2016年JASRAC音楽文化賞受賞。

Hirofumi Misawa graduated from Department of Vocal Music of Kunitachi College of Music and Department of Conducting of Universität der Künste Berlin with top honors. For five years from 1999, he was engaged in Bayreuther Festspiele as a member of choral coaches. Since 2001, he has been the Chorus Director at New National Theatre, Tokyo. He received JASRAC Music Culture Award in 2016.

マーラー： 交響曲第3番 二短調

グスタフ・マーラー（1860～1911）の第3交響曲は異様な構成の作品である。冒頭楽章と終楽章はどちらも演奏時間30分前後、優にヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）の交響曲一つ分くらいの長さがある。その間には2つのスケルツォ楽章（第2・第3楽章）、そして2つのリート楽章（第4・第5楽章）が挟まる。

ハンガリーの哲学者ジェルジ・ルカーチ（1885～1971）は近代小説のことを、「神なき世界の叙事詩」と呼んだ。古代のギリシャ悲劇は、世界の最も本質的な法則を抽出しようとする。それに対してホメロス（古代ギリシャの吟遊詩人）らの叙事詩は、世界のすべてを描き尽くそうとする。だが近代において世界はもはや、神が^{つかさど}られる調和したそれではない。既に壊れている世界を、それでもなお統一的なものとして提示するには、その矛盾に満ちた森羅万象を網羅し尽くし、内部に無数の矛盾と亀裂を抱え込みつつも、それらを「一つの」世界とする以外にやり方はない。マーラーはこの第3交響曲を「世界がそこに投影される巨大な交響曲」と語った。それはまさに、ルカーチのいう近代の叙事詩であり、マーラーが大好きだったジャン・パウル（1763～1825）的な意味での近代小説である。

折に触れてマーラーは、この交響曲の構成を比喩的に説明している。例えば第1楽章は「夏が行進してやってくる」、第2楽章は「草原の花々が私に語ること」、第3楽章は「森の獣が私に語ること」、第4楽章は「夜が私に語ること」、第5楽章は「天使が私に語ること」、第6楽章は「愛が私に語ること」。そして当初の構想では、このうえにさらに第7楽章として、「天国の生活」または「こどもが私に語ること」が来る予定だった。とはいえ、さすがのマーラーも第7楽章まで一つの交響曲に含めることは最終的に断念し、それを第4交響曲として分けて作曲することとなる。

いずれにせよマーラーが意図したのは、「一段ずつ上り詰めていく発展のすべての段階を含み」、「自然の無生物状態から始まり、ついに神の愛へ高まっていく」一つの巨大な叙事的プロセスを描くことであった。

第1楽章はマーラーの作品中でも最も謎に満ちた音楽である。尋常ではない巨大オーケストラが、ここでは巨大な1つのプラスバンドに変貌させられる。一応ソナタ形式を守ってはいるが、それはまるで3つの行進曲がばらばらに並べられているように響くだろう。冒頭の8本のホルンが吹き鳴らすテーマは、デフォルメされ肥大化した、田舎の郵便馬車のメロディの幻覚か。それに続くのは、例えば第5交響曲

でもなじみの、絶望的な葬送行進曲。そこに遠くから響くかわいらしい鼓笛隊のマーチが重なってくる。そして楽章の最後は、マーラーの第1交響曲のフィナーレがそうであったように、全オーケストラが笑いの発作にとりつかれたような、突然の呵呵大笑がすべての矛盾を吹き飛ばす。

既に述べたように第3交響曲では、スケルツォ楽章が二重化されている。まずメヌエットと題された**第2楽章**は、少しロココ風の甘ったるいサロン音楽。続く**第3楽章**のは村祭りの場面にいきなりワープしたような、粗野な舞曲。そこにシュールレアリズム映画のように、途中で唐突にポストホルンのメロディが重ねあわされる。後の第6交響曲でカウベルの響きがモンタージュされる場面の先取りだ。

なお第3楽章のメロディは、歌曲「夏の交代」を流用したもの。原曲は『少年の不思議な角笛』によっており、「かっこうは池に落ちて死んでしまった、でも代わりにうぐいすが歌ってくれるさ」といった、野卑でグロテスクなユーモアが印象的である。

リート楽章もまた二重化されている。しかも**第4楽章**はフリードリヒ・ニーチェ(1844~1900)の詩を用い、それに対して同じく『少年の不思議な角笛』の詩による**第5楽章**は、民話的なキリスト教世界を描く。キリスト教を否定する世紀末の大都会のインテリに支持されたニーチェ。そして民衆説話的なものに変形された、アルカイック(古風、素朴)なキリスト教の記憶の古層。スケルツォ楽章がそうだったように、リート楽章もまた2つの「世界」に分裂している。

こうしたありとあらゆる矛盾は、**終楽章**に至ってようやく1つの響きの中へ統一される。このコラル的な楽章でマーラーが意図していたのは神の愛であり、それも第2交響曲《復活》のような「裁く神」ではなく、万物に宿り、万物に命を吹き込む、汎神論的な神の姿である。第1および第2交響曲が「ヒーロー型／運命型」の交響曲だったとすれば、この第3交響曲でマーラーは初めて、後の第9交響曲へと通じるような「帰依するフィナーレ」で曲を閉じた。これはマーラーの全作品の中でも屈指の感動的な楽章である。

なお作曲は1892~96年、特に1895/96年の夏の休暇中に行われ、1896年にアルトゥール・ニキシュ(1855~1922)指揮のベルリン・フィルが第2楽章を、1897年にフェリックス・ワインガルトナー(1863~1942)指揮のベルリン宮廷カペレが第2・3・6楽章を演奏。全曲の初演は1902年6月9日に作曲者の指揮によって、クレーフェルトの第38回トーンクンストラー祭において行われた。

(岡田暁生)

- 第1部 第1楽章 力強く。決然と
第2部 第2楽章 メヌエットのテンポで。とても中庸に
第3楽章 気楽に。スケルツァンド。あわてずに
第4楽章 きわめてゆるやかに。神秘的に
第5楽章 活発な速度で、表情は大胆に
第6楽章 ゆるやかに。平静に。気持ちをこめて

作曲年代：1892～96年

初演：1902年6月9日 クレーフェルト 作曲者指揮

楽器編成：フルート4（第1～4はピッコロ持替）、オーボエ4（第4はイングリッシュホルン持替）、小クラリネット、クラリネット4（第3はバスクラリネット持替、第4は小クラリネット持替）、ファゴット4（第4はコントラファゴット持替）、ホルン8、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2組、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、チャイム、ササラ、タンブリン、舞台裏にポストホルン、ハープ2、弦楽5部、アルト独唱、児童合唱、女声合唱



©Österreich Werbung, Photographer: Diejun

マーラー：交響曲第3番

歌詞対訳

4. Zarathustras Mitternachtslied

Friedrich Nietzsche,
from „Also sprach Zarathustra “

O Mensch!
Gib acht!
Was spricht die tiefe Mitternacht?
"Ich schlief, ich schlief -,
Aus tiefem Traum bin ich erwacht: -
Die Welt ist tief,
Und tiefer als der Tag gedacht. "

O Mensch!
"Tief ,
tief ist ihr Weh -,
Lust - tiefer noch als Herzeleid:
Weh spricht: Vergeh!
Doch alle Lust will Ewigkeit -,
- will tiefe, tiefe Ewigkeit!"

5. Armer Kinder Bettlerlied

Achim von Arnim & Clemens Brentano,
from „Des Knaben Wunderhorn “

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

Es sungen drei Engel einen süßen Gesang,
Mit Freuden es selig
in dem Himmel klang;
Sie jauchzten fröhlich auch dabei,
Daß Petrus sei von Sünden frei.

第4楽章 ツアラトウストラの真夜中の歌

フリードリヒ・ニーチェ
『ツアラトウストラはかく語りき』より

おお人間よ！
よく聞け！
深い真夜中には何を語っているか？
「私は昏々と眠っていた、
深い夢から私はいま目覚めた。
この世は深い、
昼が考えた以上に深い！」

おお人間よ！
「深い、深いのだ！
この世の痛みは深い。
快^{よこ}びは — 快^{よこ}びは心の奥底の苦しみよりも深い。
痛みは言う、消え去れ！ と。
だがあらゆる快^{よこ}びは永遠を求める、
深い、深い永遠を求める！」

第5楽章 哀れな子らのもの乞う唄

アヒム・フォン・アルニム&クレメンス・ブレンターノ
『少年の不思議な角笛』より

合唱
びむ ばむ びむ ばむ…

あるとき三人の天使が 愛らしい歌をうたっておりました
いかにも嬉しそうに
それは天上で淨らかな響きをふりまいていました
天使たちは愉^{たの}しげに 歓^{たの}びの声をあげて言いました
「ペテロの罪は晴れたよ」

Und als der Herr Jesus zu Tische saß,
Mit seinen zwölf Jüngern
das Abendmahl aß,
Da sprach der Herr Jesus:
Was stehst du denn hier?
Wenn ich dich anseh', so weinest du mir.

Alt:

Und sollt' ich nicht weinen, du gütiger Gott.

Chor:

Du sollst ja nicht weinen!

Alt:

Ich hab' übertreten die zehen Gebot;
Ich gehe und weine ja bitterlich,

Chor:

Du sollst ja nicht weinen!

Alt:

Ach komm und erbarme dich über mich.

Chor:

Bimm bamm, bimm, bamm, ...

Hast du denn übertreten die zehen Gebot,
So fall auf die Knie und bete zu Gott!
Liebe nur Gott in alle Zeit,
So wirst du erlangen die himmlische Freud.

Die himmlische Freud, die Selige Stadt,
Die himmlische Freud, die kein Ende mehr hat;
Die himmlische Freude war Petro bereit't
Durch Jesum und allen zur Seligkeit.

Bimm bamm, bimm, bamm, ...

そう イエスさまが食卓にお着きになって
十二人の弟子たちと
最後の晩餐をおとりになっていたときのこと
イエスさまはこう言われました
「そこでいったい何をしておる?
私と目があうと 泣いたりして」

アルト独唱

「泣くでないと仰るですか ころろ優しい神さま

合唱

汝、泣くべからず 汝、泣くべからず!

アルト独唱

おいらはあの十戒を 破ったのでござります
『ペテロは行ってひどく泣く』のでござります

合唱

汝、泣くべからず 汝、泣くべからず!

アルト独唱

どうかお願いします おいらを憐れんでくださいまし」

合唱

びむ ばむ びむ ばむ...

「十戒を破ったのなら
ひざまづいてな 神さまに向かって祈れ
いつでも ひたすらに神さまをお慕い申し上げることだ
そうすればおまえも 天上の喜びを手にすることだろう」

天上の喜び それは浄福の都
天上の喜び それは尽きることを知らない
天上の喜び それはペテロにも与えられていた
清らかな幸あれと イエスさまはそれを
皆にお与えになったのです

びむ ばむ びむ ばむ...

(訳／船木篤也)



第854回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.854 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年4月19日(木) 14:00開演

Thu. 19. April 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

リムスキー=コルサコフ: 序曲《ロシアの復活祭》 op.36 (15分)
Rimsky-Korsakov: "Russian Easter Festival" Overture, op.36

ボロディン: 歌劇『イーゴリ公』より
[だったん人の娘たちの踊り] [だったん人の踊り] (14分)
Borodin: Dance of Polovtsian Maidens and Polovtsian Dances from "Prince Igor"

休憩 / Intermission (20分)

チャイコフスキー: 交響曲第3番 二長調 op.29
《ポーランド》 (45分)

Tchaikovsky: Symphony No.3 in D major, op.29, "Polish"

- I Introduzione e Allegro:
Moderato assai. (Tempo di marcia funebre) - Allegro brillante
- II Alla tedesca: Allegro moderato e semplice
- III Andante: Andante elegiaco
- IV Scherzo: Allegro vivo
- V Finale: Allegro con fuoco (Tempo di Polacca)

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

リムスキー＝コルサコフ： 序曲《ロシアの復活祭》op.36

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844～1908)の序曲《ロシアの復活祭》op.36は、1888年の夏に作曲された。原題は「明るい祝日」というような意味だが、これはロシアでは復活祭(パスハ)のことを指す。リムスキー＝コルサコフは自伝でこの曲について、「私が切に再現したいと思ったのは、この祝日の伝説的で異教的な側面、そして、受難土曜日の夕方の荘厳と神秘から、復活日曜日の朝の奔放な祝祭への移りかわりだ」と述べている。

主題の多くは、1772年にモスクワで出版されたロシア正教の聖歌集『オビホード』(ロシアで最初に出版された楽譜)から採られているが、オーケストレーションはリムスキー＝コルサコフならではの華やかで色彩的なものだ。また、1887年に作曲された《スペイン奇想曲》や1888年の交響組曲《シェヘラザード》と同様、独奏ヴァイオリンが活躍する。この曲は、「力強い仲間(ロシア五人組)」のメンバーで、先に世を去ったモデスト・ムソルグスキー(1839～81)とアレクサンドル・ポロディン(1833～87)の思い出に捧げられた。

曲は序奏付きソナタ形式で書かれている。2分の5拍子の序奏では、聖歌《願わくは神起きたまえ》の旋律が木管で提示され、独奏ヴァイオリンのカデンツァをはさみ、聖歌《天使は嘆く》の旋律を独奏チェロが弾く。このやりとりが繰り返されたあと、ハーブのグリッサンドがあり、アレグロ・アジタートの主部に入る。

主部は、聖歌《神をにくむものは御前より逃げ去らんことを》の主題で始まる。第1主題はその少しあとに登場する。ミハイル・グリムカ(1804～57)の歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲に似た、「タータタ/タータタ」というリズムを持つ力強い主題だ。第2主題は二長調の美しい旋律で、ヴァイオリンと木管に加え、2人のヴァイオリン奏者がハーモニックス(倍音の原理を利用した弦楽器の高音)で弾く清澄な音色が印象的だ。これに、G(ト)音と増8度下のFis(嬰へ)音が交互に鳴る鐘のような音型、復活を告げるファンファーレなどが続く。

テンポが遅くなり、チェロ6人(2人ずつ3部に分けられている)とコントラバスの伴奏で、第2トロンボーンがレチタティーヴォを吹く部分は司祭の朗読を思わせる。ティンパニのソロから再び速いテンポに戻り(ここからが展開部)、これまでに登場した素材が次々に登場する。

再現部を経て大規模なコーダへ至り、2つの主要主題の展開にファンファーレを交えて華やかなクライマックスが築かれる。

(増田良介)

作曲年代：1888年夏

初 演：1888年12月15日（ロシア旧暦12月3日） サンクトペテルブルク

作曲者指揮 ロシア交響楽演奏会

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、大太鼓、タムタム、グロッケンシュピール、ハーブ、弦楽5部

ボロディン：

歌劇『イーゴリ公』より

「だったん人の娘たちの踊り」「だったん人の踊り」

「力強い仲間（ロシア五人組）」の一員だったアレクサンドル・ボロディン（1833～87）は、19世紀ロシアの最も重要な作曲家の1人だが、彼の作品はととても少ない。これは、ボロディンが専業の作曲家ではなく、化学者としての多忙な生活のあいまに作曲をしていた「日曜作曲家」だったからだ。

叙事詩『イーゴリ軍記』（作者不詳／12世紀）に基づく愛国的な歌劇『イーゴリ公』は、ボロディンの畢生の大作だ。しかし、遊牧民族ポロヴェツ人に対する戦いと敗北、そして敵に捕らわれたイーゴリ公の逃亡と帰還を描くこの作品も、18年にわたって断続的に作曲が続けられたにもかかわらず、ボロディンの死によって未完に終わり、リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）とグラズノフ（1865～1936）によって補筆完成された。

「だったん人の娘たちの踊り」と「だったん人の踊り」は、オペラの中では少し離れた箇所演奏される別の曲なのだが、演奏会ではセットで演奏されることが多い。「だったん人の娘たちの踊り」は、タン布林などの伴奏に乗せてクラリネットが軽快に走り回って始まる8分の6拍子の舞曲で、一般的な版では第2幕の2曲目に置かれている。一方「だったん人の踊り」が出てくるのは、同じ第2幕の最後だ。敵将コンチャク汗が、囚われの身となったイーゴリ公を慰めるために踊らせる曲で（コンチャク汗は武人としてイーゴリ公を認め、尊敬している、という設定になっている）、原曲では合唱とともに演奏される。ボロディンならではの甘美な旋律や力強いリズムにあふれた音楽は人気が高く、CMなどにもしばしば用いられている。なお原題は「ポロヴェツ人の娘たちの踊り」「ポロヴェツ人の踊り」で、ポロヴェツ人とはだったん（タタール）人とは本来違う民族なのだが、日本では古くからこの訳が定着している。（増田良介）

作曲年代：1875～79年

初 演：1879年3月11日（ロシア旧暦2月27日） サンクトペテルブルク

リムスキー＝コルサコフ指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、小太鼓、タン布林、ハーブ、弦楽5部

チャイコフスキー： 交響曲第3番 二長調 op.29《ポーランド》

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の交響曲第3番は、彼の交響曲のうちでは最も演奏される機会が少ない。しかし、有名なピアノ協奏曲第1番を数か月前に完成したばかりで、交響曲第3番の直後にはバレエ音楽《白鳥の湖》を手がけるなど、傑作を次々に生み出していた時期の作品で、音楽的には充実している。また、交響曲第1番や第2番には色濃かった「力強い仲間（ロシア五人組）」の影響を脱却したスタイルや、2つのスケルツォ楽章をもつ5楽章構成といった新しい試みもあり、聴きどころは少なくない。なお、《ポーランド》という愛称は作曲者自身によるものではなく、第5楽章にポロネーズのリズムが使われていることから、英国で付けられたものだ。

この作品の成立には、ウラジーミル・シロフスキー（1852～93）という人物が深く関わっている。彼はチャイコフスキーがモスクワ音楽院で教え、その才能を高く評価していた学生で、歌劇『エフゲニー・オネーギン』の台本を作曲者とともに執筆したコンスタンチン・シロフスキー（1849～93）の弟だ。彼らは親しい友人となり、チャイコフスキーは1870年代に、ウクライナのウーソヴォにあったシロフスキーの領地をしばしば訪れている。1875年の夏もチャイコフスキーはシロフスキーの領地に滞在した。交響曲第3番は、この年の6月17日（以下、日付は新暦による）にここで作曲が開始され、7月2日にはほぼ書き上げられた。彼はその後ウーソヴォを離れ、別の友人の領地に移るが、8月13日にはオーケストレーションまですべてが完了し、交響曲はシロフスキーに献呈された。

初演は1875年11月19日、モスクワの第1回ロシア音楽協会演奏会で、ニコライルビンシテイン（1835～81）の指揮で行われた。初演は好評を博したようだ。初演後、作曲者はリムスキー＝コルサコフ（1844～1908）宛ての手紙に、「私の見る限り、この交響曲に特に優れたアイデアというのはありませんが、技量としては一歩前進しています。中でも第1楽章と2つのスケルツォには満足しています」と記しており、控えめながらある程度の自信を持っていたことが窺える。

第1楽章「序奏とアレグロ」 モデラート・アッサイ（葬送行進曲のテンポで） 二短調 4分の4拍子～アレグロ・ブリランテ 二長調 4分の4拍子 第3番は、チャイコフスキーの交響曲のうちで唯一の長調交響曲なのだが、序奏はやはり短調で、葬送行進曲風のリズムによる憂鬱な性格のものだ。しかし主部に入ると雰囲気さがらりと変わり、二長調の快活な第1主題（トゥッティ）と、ロ短調ながら舞曲風の伴奏リズムを持つ第2主題（オーポエ）に基づいて、エネルギーに進んでいく。

第2楽章「アラ・テデスカ」 アレグロ・モデラート・エ・センプリーチェ 変ロ長調
4分の3拍子 複合3部形式。アラ・テデスカとは「ドイツ風に」の意味。第1部
分は、ノスタルジックなレントラー風の主部がワルツ風の間部をはさむ形になっ
ている。作曲者は後年、この中間部を、劇音楽《ハムレット》の第2幕前奏曲と
して転用している。第2部（トリオ）は木管が3連符で細かく動く。この3連符の
音型に重なって冒頭の主題が戻ってくると第3部となる。楽章の終わりには長い
コーダがあり、余情を残して終わる。

第3楽章「アンダンテ」 アンダンテ・エレジアーコ ニ短調 4分の3拍子 自由
なソナタ形式。序奏に続き、ファゴットの吹く寂寥感のある第1主題、続いて、第
1ヴァイオリンとフルートが歌う甘美な第2主題が提示される。展開部はごく短い。
再現部でも、序奏主題、第1主題、第2主題の順に現れるが、第1主題がごく断
片的なのに対し、第2主題は壮大に歌われ、この楽章のクライマックスを築く。
最後に第1主題の断片が少し現れて、楽章を閉じる。

第4楽章「スケルツォ」 アレグロ・ヴィーヴォ ロ短調 4分の2拍子 3部形式。
2拍子によるスケルツォ。主部は、さまざまな楽器が音階を上下行する繊細な音
楽（後半にトロンボーンのリコーダがある）。中間部（トリオ）には、1872年に書かれ
た《ピョートル大帝生誕200年記念カンタータ》の前奏曲の素材が使われている。
なお、上述のリムスキー＝コルサコフへの手紙でチャイコフスキーは、「（2つのス
ケルツォのうち）2番目のものは難しく、長いリハーサルの後でも、そうあるべき
演奏にはほど遠かった」と書いている。

第5楽章「フィナーレ」 アレグロ・コン・フォーコ（テンポ・ディ・ポラッカ）ニ長
調 4分の3拍子 ロンド形式の壮麗なフィナーレ。威風堂々たるポロネーズのリズ
ムによるロンド主題に導かれて、祝典的な第1副主題、3連符が特徴的なロ短調
の第2副主題が現れたあと、ロンド主題に基づくフーガが始まる。楽章の終わり
には第1副主題が再び木管・金管楽器によって高らかに吹奏され、華やかなコー
ダへと続く。

(増田良介)

作曲年代：1875年6月17日～8月13日

初 演：1875年11月19日（ロシア旧暦11月7日）モスクワ
ニコライ・ルビンシテイン指揮 第1回ロシア音楽協会演奏会

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ト
ランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部



OTOMO Naoto

Conductor

指揮
大友直人

4/22

©Rowland Kirishima

桐朋学園大学を卒業。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘各氏に師事した。大学在学中からN響の指揮研究員となり、22歳で楽団推薦により同団を指揮してデビュー。現在、群響音楽監督、東響名誉客演指揮者、京響桂冠指揮者、琉球響音楽監督。また、2004年から8年間にわたり、東京文化会館の初代音楽監督を務めた。

在京オーケストラの定期演奏会にとどまらず、2012年3月にはハワイ響のオーブニングコンサートを指揮、以降定期的に客演し、同年6月にはロレーヌ国立管の定期公演に客演、絶賛された。2013年にはエネスク国際音楽祭に招かれ「弦楽八重奏曲op.7」を演奏。“繰り返し演奏されているが、今回の演奏は最高の演奏”“日本のオーケストラ演奏が西洋音楽への新しい希望を見出した”と評され、欧米での活躍にも大きな期待が寄せられている。

第8回渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2000年）、第7回齋藤秀雄メモリアル基金賞（2008年）を受賞。

Naoto Otomo graduated from Toho Gakuen School of Music. He made his debut with NHK Symphony Orchestra, Tokyo at 22. Currently Otomo is Music Director of Gunma Symphony, Honorary Guest Conductor of Tokyo Symphony, Conductor Laureate of Kyoto Symphony, and Music Director of Ryukyu Symphony. He was the first Music Director of Tokyo Bunka Kaikan for 8 years (2004-12). Otomo received 8th Akeo Watanabe Music Foundation Award in 2000 and 7th Hideo Saito Memorial Fund Award in 2008.

都響・八王子シリーズ

Hachioji Series

TMSO

オリンパスホール八王子

2018年4月22日(日) 14:00開演

Sun. 22. April 2018, 14:00 at Olympus Hall Hachioji

指揮 ● 大友直人 OTOMO Naoto, Conductor
ピアノ ● 牛田智大 USHIDA Tomoharu, Piano
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30 (43分)

Rachmaninov: Piano Concerto No.3 in D minor, op.30

- I Allegro ma non tanto
- II Intermezzo: Adagio
- III Finale: Alla breve

休憩 / Intermission (20分)

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 op.95 B.178

《新世界より》 (40分)

Dvořák: Symphony No.9 in E minor, op.95 B.178, "From the New World"

- I Adagio - Allegro molto
- II Largo
- III Scherzo: Molto vivace
- IV Allegro con fuoco

主催：公益財団法人東京都交響楽団

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い | 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



Piano
**USHIDA
Tomoharu**

ピアノ
牛田智大

©Ariga Terasawa 衣装企画：(株) オンワード樫山 経製：グッドヒル (株)

1999年いわき市生まれ。6歳まで上海で育つ。幼少時代から音楽に非凡な才能を見せ、8歳より5年連続で1位を受賞したショパン国際ピアノコンクール in ASIAをはじめ、複数のコンクールで優勝。2012年3月、日本人ピアニストとして最年少（12歳）でユニバーサルよりCDデビュー。2015年『愛の喜び』、2016年『展覧会の絵』は『レコード芸術』特選盤に選ばれている。国内外で様々なオーケストラと共演するほか、全国でリサイタルを行い、NHK、民放番組をはじめ、数多くの媒体でその活動が紹介されている。

今までに陳融楽、鄭曙星、金子勝子の各氏に師事。現在、モスクワ音楽院ジュニア・カレッジに在籍。ユーリ・スレサレフ、ウラディミル・オフチニコフほかの各氏に師事。

Tomoharu Ushida showed an exceptional talent in music from his early age and has won 1st prizes at several competitions. In March 2012 (12 years old), he released a debut CD (Universal Music Japan) as the youngest Japanese pianist in history. Since then, Tomoharu has performed in concerts throughout Japan and played with a number of orchestras both outside and inside of Japan. Tomoharu now studies under Yuri Slesarev and Vladimir Ovchinnikov, professors of Moscow Conservatory.

ラフマニノフ： ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30

セルгей・ラフマニノフ (1873~1943) は1906年秋、ロシア国内の政情不安を避けて作曲に専念するために、ドレスデンに居を定めた。ドレスデンで彼の創作意欲は大きな高まりをみせ、交響曲第2番や交響詩《死の島》などの傑作がこの時期に生み出されることになる。

ピアノ協奏曲第3番もそのドレスデン時代に構想がなされ、1909年にモスクワに戻ってから本格的に作曲が進められる。この年の秋から翌1910年初めにかけてラフマニノフはピアニストとしてアメリカへの演奏旅行を計画しており、その際に披露する新作としてこの協奏曲を書いたのだった。作品は出立前の9月には大かた出来上がったが、細部の仕上げは旅行中になされ、1909年11月28日ニューヨークにて彼の独奏、ウォルター・ダムロッシュ (1862~1950) の指揮で初演されている。また翌年1月16日にラフマニノフはニューヨークでグスタフ・マーラー (1860~1911) の指揮によってこの曲を再演した。

この作品は伝統的な3楽章構成のうちに名技的な鮮やかさとロシア的な叙情とを結び付けている点で、前作のピアノ協奏曲第2番のスタイルを受け継いでいるが、技巧的な難しさという点では第2番をはるかに上回り、力強さと敏捷さの両方を要する指の動きと、時に跳躍的、時に連続的に現れる広い音域の和音をしっかりと掴んで響かせる力量がピアニストに求められている。管弦楽パートもきわめてシンフォニックに書かれているが、第2番と違って (もちろんソリストに力量があることを前提としてのことだが) ピアノ独奏がオーケストラの響きに埋もれないように書かれている点に、ラフマニノフの書法の一層の熟達ぶりが示されているといえるだろう。

全体の綿密な造りにも注目すべきものがある。第1楽章の第1主題が全体の循環主題となり、またそれに由来する様々な楽想が全曲にわたって現れる一方、曲冒頭の付点リズムが全曲とおしての重要なリズム動機となっているし、さらに第1楽章第2主題も終楽章で回帰し、第2、第3楽章の主要主題も第1楽章の主題と関わりがあるなど、作品全体が第1楽章の主要な主題と動機から発展しているといつて過言ではない。それによって全曲が有機的な統一体を形成しているわけだが、にもかかわらず、聴いた印象ではヴィルトゥオーゾがラプソディックな奔放さでもって気分赴くままに楽想を繰り出していくような感がある。超絶的な名技の鮮やかさと論理的構成とが表裏一体となっているところにこの作品の傑作たるゆえんがあるといえるだろう。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント 付点リズムを伴う2小節の導入の後、独奏ピアノが全曲の循環主題となる第1主題を提示する。両手ユニゾンでシンプルに示されるこの主題は、作曲家自身は否定しているもののロシア（キエフ）の聖歌《ああ救世主よ、汝の棺を番兵が守る》に基づくといわれるもの。第2主題はまず弦、次いで管に軽快なスタッカートで現れ、続いてピアノがたっぷりしたレガートのカンタービレで発展させる。

展開部は第1主題冒頭の再帰（ここも独奏の両手ユニゾン）に始まり、起伏に満ちた展開が繰り広げられた後、カデンツァ（ラフマニノフ自身のものが2種類ある）へ至る。やがてピアノ独奏を背景に管楽器がソロで第1主題をリレーする部分となるが、その後カデンツァが再開されて第2主題が情感豊かに扱われる。

そして第1主題が曲頭と全く同じ形で再現されるが、この再現部はきわめて圧縮されており、第2主題の再現は（前のカデンツァで存分に扱ったこともあってか）省略されている。

第2楽章 インテルメッツォ/アダージョ イ長調の幻想的な緩徐楽章。オーボエが暗い叙情を湛えたメランコリックな主題を示し、弦が受け継いだ後、ピアノが錯綜した響きで登場して主題を濃密に変奏していく。途中テンポが速まり、循環主題（第1楽章第1主題）の変形がクラリネットとファゴットに現れて気分に変化をもたらすが、全体的には暗い情感が支配的だ。最後はピアノのカデンツァ風の華麗なパッセージを伴う経過句で休みなく次の楽章へ移る。

第3楽章 フィナーレ/アツラ・ブレーヴェ ピアノの巨匠ラフマニノフのヴィルトゥオジティをフルに発揮したようなフィナーレ。独奏が力強く示す第1主題、行進曲調の楽想、シンコーションの和音で突進するように上下行する楽想、そして広大な第2主題など、多くの楽想が現れ、さらに展開部に相当する部分では第1楽章の2つの主題が様々な形で用いられる。コーダで第2主題が壮大に浮かび上がる様は圧巻で、最後は圧倒的な興奮の渦のうちに二長調で全曲を閉じる。

（寺西基之）

作曲年代：1909年

初演：1909年11月28日 ニューヨーク

作曲家独奏 ウォルター・ダムロツシュ指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、弦楽5部、独奏ピアノ

ドヴォルザーク： 交響曲第9番 ホ短調 op.95 B.178《新世界より》

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) は1892年から95年にかけてニューヨークを本拠に活動した。すでに後期の円熟期に入り、ボヘミア (チェコ) の国民主義的な作曲家として高い名声を得ていた彼が、大西洋を超えてアメリカに移り住んだのは、ニューヨークのナショナル音楽院院長のポストが与えられたからだった。

音楽院を創設したジャネット・サーバー夫人 (1850~1946) から院長のポストの打診があったのは1891年のことで、最初はドヴォルザークはこれを断った。ボヘミアの国民的な音楽を求めて活動してきた愛国者ドヴォルザークにとって、自分が母国を離れて新大陸で活動するなど考えもできないことだったに違いない。しかし、サーバー夫人の再三にわたる懇請に、ドヴォルザークはついに契約書にサインする。相当に迷った末の決断だったが、1年に4ヶ月もの休暇が与えられることと、それまで務めていたプラハの音楽院の給料の実に約25倍という報酬がもらえるという破格の条件が決め手となった。こうして彼は1892年9月、12日間の長い旅程を経て、新大陸に到着したのだった。

新地で暖かい歓迎を受けたドヴォルザークは、当初ニューヨークの生活が気に入り、また作曲の授業やオーケストラの指導といった教授活動はもちろんのこと、院長としての雑務も忠実に果たすなど、熱意をもって職務に取り組んでいった。また、黒人霊歌やインディアンの音楽などのアメリカの民俗音楽や、アメリカ文学など、アメリカの文化に刺激を多く受けた。

そうした中、新天地での初めての大作として作曲に着手したのが交響曲第9番だった。これは1893年初めから書き始められ、同年5月に完成をみている。アメリカの詩人ロングフェローの叙事詩「ハイアワサの歌」に靈感を得たり、いくつかの楽想がアメリカの民俗音楽や黒人霊歌と通じるものであるとされるなど、この作品にはアメリカで受けた影響がさまざまな形で盛り込まれていることが指摘されている。

しかしだからといってこの作品をアメリカ的ということはできないだろう。ドヴォルザーク自身この交響曲について、わずかにアメリカ風であり、作曲にあたってインディアンの歌も含むアメリカのモチーフを集めたことなどを述べる一方で、結局はチェコの音楽であると記しているが、そのとおり、この作品はアメリカの民俗音楽の要素や新大陸の文化の影響を示しつつも、一方でそうした要素もボヘミアの音楽の特徴に重ね合わされて、まさにチェコの国民作曲家ドヴォルザークならではの民族色豊かなものに仕上げられている。

この作品を書いていた頃、すでにドヴォルザークは言語も生活習慣もまったく違

う異国の生活環境に違和感を覚え始め、母国を懐かしく思うようになっていた。やがては強度のホームシックに繋がっていくことにもなるそうした郷土への思いは、この交響曲にはっきりと刻印されているといえよう。遠く離れているがゆえに一層強まる母国を愛する感情が、この作品には滲み出ているようだ。彼自身によって付けられた題も意味深長で、「新世界」ではなく「新世界より」としているところに、新大陸から発信する母国への便り、新世界から送る母国への思いといった彼の心情が示されていると思われる。

第1楽章 アダージョ〜アレグロ・モルト どこか深刻な面持ちに始まり、突如激情を露わにする序奏は、この楽章の起伏の激しさを先取りしている。主部の第1主題（序奏において予示されている）はホルンが示す雄大なもので、これが全楽章を通じての循環主題となる。

第2楽章 ラルゴ イングリッシュホルンによる有名な主題を持つ叙情豊かな3部形式の緩徐楽章。ロングフェローの叙事詩「ハイアワサの歌」の森の葬式の情景に関わるものとされ、黒人霊歌などとの関連も指摘されているが、全体を支配するのはノスタルジックな情感である。

第3楽章 スケルツォ／モルト・ヴィヴァーチェ これもまたロングフェローの「ハイアワサの歌」の結婚の儀式でのインディアンの踊りに靈感を得たといわれるスケルツォだが、性格的には明らかにボヘミアの民俗舞曲を思わせる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 激しい情熱と郷愁感とが入り交じるソナタ形式のフィナーレ。前の3つの楽章の主題も回想しながら変化溢れる展開が繰り返される。コーダでも各楽章の主題が現れて盛り上がり築き、最後は遙かな故郷を夢見るかのような、管楽器によるホ長調の長い和音のうちに余韻を残して閉じられる。

(寺西基之)

作曲年代：1893年

初 演：1893年12月16日 ニューヨーク アントン・ザイドル指揮

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部